

五月の風―カナ

「まだかな。ミカたち……私、場所間違えちゃったのかな。」

カナは、もうかれこれ一時間も駅前ロータリーで、ミカたち吹奏楽部のメンバーを待っていた。今日は、これから隣の楽器店へ、色々な小物を買に行く予定だった。

「どうしたんだろう。何かあったのかな。どうしてみんな来ないんだろう。」

待ち合わせ時間から三時間以上過ぎた。カナは、漠然とした不安を抱えながら、待ち続けた。

「そんなところで、どうしたの。」

偶然、近所のおばさんが通りかかって声をかけてくれた。カナの目から涙がこぼれた。

夜、カナはミカの自宅に電話してみた。

「今日、何かあったの。どうしてみんな来なかったの。私、場所を間違えたのかなと思ってたんだけど。」

「えっ、あっ、待ち合わせ場所が変わったんだ。昨日の夜に、ラインで楽器店に直接集まるってことになったの。カナに伝えてなかったつけ。ごめんごめん。」

「そうなの。みんなは楽器店に行ったんだね……。残念だなあ、楽しみにしてたんだ。」

カナは、それ以上何も言えずに電話を切った。

カナは、お母さんに言った。

「お母さん、やっぱりスマホ買ってくれない。みんなもってるんだ。」

「まだ必要ないでしょ。高校生になるまでは我慢するって自分で決めたんじゃないの。」

「やっぱりだめなんだよ。それがないと……。」

昼間の惨めさが後から後から押し寄せてきた。カナは、自分の心に歯止めがきかなくなった。

「お母さんは私の気持ち、全然分かってくれてない。大嫌い。」

部屋で一人になって、カナは考えた。ちよつと言い過ぎたな。お母さんのせいじゃない。なんとなく、最近、みんなが私の知らないところで何か言ってるような気がしていた。学校でもラインの話ばかりだし、ついて行けないようになって感じた。今日はわざと外されたのかな。そうかもしれないな。どうしよう。胸が締め付けられるような不安が押し寄せてくる。こみ上げてくる涙をこらえて、カナ

はじっと考えた。

冷たい空気が吸いたくなつて、ベランダに出た。穏やかな静けさに包まれて、カナの心は次第に落ち着きを取り戻していった。お母さんの言うとおりに、おばあちゃんがスマホを買ってくれるっていったとき、高校生までスマホはいらないって言ったのは自分だった。貴重品だから壊したりなくしたりしたら大変そうだし、なによりスマホを持つたらずっとスマホをいじってそれで、ただでさえ時間の使い方が悪くてお母さんに怒られてばかりいるのに。だから、高校生までは持たないって決めたんだ。でも、友達に外されるのは、ちよつと。はあ。また、涙がこぼれそうになった。



次の日、カナは学校へ行く途中で、前を歩くミカを見つけた。胸がドキドキしてきた。足が前に出にくくなる。でも……昨日、ベランダに出て考えたことが頭に浮かんできた。ちゃんと伝えなくちゃ……。カナは思い切つて、後ろからミカの肩をたたいた。

「おはよう、ミカ。私、ラインできなくてごめんね。ミカには迷惑かけちゃうけど、何かあったら、また教えてね。」

ちゃんと言えた。ミカの瞳にみるみる涙がふくらんできた。

「昨日はごめん。カナ。……」

あふれる涙も気にせず、そう言うミカを見て、カナは、心からよかつたと思った。ミカの足下に涙が二粒三粒と落ちた。

「ミカ、何泣いてるの。友達だよ、私たち。」

「うん。」

並んで歩く二人の心の中を、五月の風が吹き抜けていった。

○ カナがベランダに出て考えたことはどんなことだろうか。また、「ちゃんと伝えなくちゃ……」と思ったことは、どんなことだろうか。

○ カナの考えや行動から学ぶことはどんなことか。

